さぎとり物語

天保、弘化のころといわれている。

稲川町大舘の南につづく中野部落（旧三梨村）、もとの古四王中学校の西北のあたり、学校の東側に、阿弥陀堂と呼ばれている小さなお堂がある。その前には、むかし、大きな松の木が生えていた。そのてっぺんに、さぎが巣を作っていたころのことである。

この近くに吉兵衛という人が住んでいた。妻と二人で、川連塗りの仕事に精を出していた。赤ん坊がいたが、仕事をしている間、ほとんど一日中、その子守りは、吉太郎という男の子の仕事であった。男の子なので、吉太郎は、子守りがいやでいやでたまらないが、今のように学校があるわけでなし、仕事のかわりだからしようがない。たまたま、その阿弥陀堂の前の松の木にさぎが巣を作っているのを見つけてしまった。吉太郎は、何とかして、その巣の中をのぞいて見たい。できればそのさぎの子を手にして見たくてたまらない。

とうとう、ある日、その松の木に登る決心をした。しかし、せなかには、赤ん坊をおぶさっている。ふたりかかえもある松の大木、何かよい方法がないかと考えた末、松の木のそばに、一本の杉の木が生えている。これをのぼったら松の木にうつれるかも知れない。さすが、男の子の吉太郎、赤ん坊をおんぶしたまま、その杉の木を、よじのぼっていったものだ。とうとう松のうつることができたが、めざすさぎの巣は、とても手がとどきそうもない枝のさきの方にある。吉太郎は、赤ん坊をおんぶしていてはとてもだめなので、とうとう赤ん坊をせなからおろし、自分のきものをぬいで、赤ん坊を包み、自分のおびをたして、松の木の幹にしっかりと、くくりつけた。そこでまるはだかになってしまった吉太郎、静かに枝のさきの方に、はっていった。やっとめざす巣に手がとどいたので、ギャー、ギャー鳴きさわぐさぎのひよこを、かたっぱしからとり出し、下に投げ落とした。落とされたさぎの子は、ギャー、ギャーと鳴きさわぐ。木の上にくくりつけられた赤ん坊はワーワー泣き出す。このさわぎをききつけた近所のおとなたちが、阿弥陀堂の前に来て見たらこの始末。

「悪いわらしだ。吉太郎、早くおりて来い」こわくなった吉太郎、すべるようにおりてきて、くごうやみ（いちもくさん）にどこかに逃げていってしまった。

さて、おとなたち、松の木のこずえにくくりつけられた赤ん坊を助けなければならないが、余り高いところなので、誰ものぼるものがいない。ただあれよあれよと下から見あげているばかり。おとされたさぎの子は、ギャーギャー、上では赤ん坊がワーワー、こまりはてた人々は、逃げて行った吉太郎をやっとさがし出して連れて来た。

泣きべそをかいている吉太郎を「赤ん坊を下ろしてきたら、しからないから！」となだめすかした。やっとなっとくした吉太郎、人々がどうしてのぼるだろうかと見ていると、そばの杉の木をするするとのぼって、松の木にうつりやすやすと赤ん坊をおんぶして下りてきた。

そこで、人々、やっと安堵の胸をおろしたということである。

この話は、弘化二年（一八四五）稲川町大舘の井上武兵衛という川連塗の蒔絵師が絵まじりの文で書き残した「夜籠雑談噺」という本の中に出ている。終りのところに「だから男わらしに子守りなどさせぬものだ」と書きたしている。阿弥陀堂の前には、このあいだまで、その大きな杉の木があったということである。今は町のなかにさぎが巣をつくることもなくなったし、したがって、さぎの巣をさがし出し、ひよこも下にたたき落とすような悪童ももちろんいなくなってしまった。